

【聖書】

ルカ 11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こういなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。4 わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を 皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

ローマ書 5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。3 それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、4 忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。6 わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。7 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。9 わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。10 もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。11 そればかりではなく、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。

1 御国がきますように

今日、ご一緒に聖書に聴く主の祈りは、「御国がきますように」です。直訳しますと、「あなたの王国が来ますように」、つまり「父なる神の国が来ますように」という祈りであり、神の国がテーマです。聖書には、神の国についての記述がたくさんあります。そのうちのひとつですが、主はご自身の宣教活動の最初、「自分たちから離れないでください」と引き止める群衆に対して、「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ。」(4:43)と宣言されました。福音とはよいニュース。神の国がこ

の地上にやってきたという喜ばしい知らせを宣べ伝えることこそ、イエスさまがこの地上にやって来られた目的だとわかります。

2 歴史は繰り返す

さて、日本の八月は、戦争について考える季節です。戦争する主体である「国」についても考えます。歴史を振り返ると、人間の作り上げた国々は戦いに明け暮れ、自分たちだけの利益を追い求めてきました。そんな人間の歴史を見ていると、人間を悪へと誘う「悪魔」は確かにいると思います。今月、共に読み交わしている詩編62で「お前たちはいつまで人に襲いかかるのか。亡きものにしようとして一団となり／人を倒れる壁、崩れる石垣とし、人が身を起こせば、押し倒そうと謀る。常に欺こうとして／口先で祝福し、腹の底で呪う。」と非難されている相手は、人を自己中心的な戦争に駆り立てる悪魔だと考えることもできます。そのような悪魔の誘惑の力に対して、旧約の詩人は、「力が力を生むことに心奪われるな」と警告します。この警告は、人間社会では力をもった者が更にその力を得る誘惑に抗うことができず暴走することが繰り返されてきたことを示しています。その権力の暴走を食い止めるための人類の知恵として、「民主主義」という制度が生まれ発展してきました。が、これも戦争をなくすことはできない、完全でないことは歴史が証明しています。権力者でない民衆もまた、自分たちだけの利益を追い求めるものだからです。それは、旧約聖書にあるとおり、遠い古代世界から続いてきた私たち人間のリアルな姿です。人間はなかなかお互いに愛し合い、赦しあい、弱い者の立場を考えて行動することができない…時代によって状況は異なりますが、人間の歴史の本質は同じことをグルグルと繰り返しており、最終的には滅亡へと向かって進んでいるようです。人間のつくる国々の支配のもとにいる限り、私たちもこのような歴史を超えることはできないように思えます。

3 義なる愛、愛なる義が支配する神の国

しかし、この人間の歴史に突入してきたものがありました。キリスト・イエス、イエスさまの十字架と復活です。人間の滅びへの歩に楔を打ち込み、神ご自身の支配を確立して人間を救うために、神の国を実現するために、父なる神は主イエスをこの地上に完全な人間としてお送りになりました。私たちが神の義なる愛、愛なる義の支配のうちに生きることができるためです。さきほど賛美した262番「十字架のもとぞ」の冒頭は、「十字架のもとぞいとやすけき。神の義と愛のあえる所」とあります。人間の愛は、時に相手を支配しようという傾向をもち、敵を愛することもできません。人間の正義は、独善的な正義に陥りやすい正義です。自己中心的な裁きとなります。

神の義は完全な正義です。過てば裁かざるを得ない、神は間違えることができないからです。お互いに挑み合い戦いあう人間を裁かざるを得ないのです。しかし、神の愛もまた完全な愛です。ご自身の敵である人間を深く憐れむ愛。さばき合い滅ぼしあう人間の悲惨さをご自身のものとして苦しむ愛なのです。神は愛なる義の方、義なる愛の方。だからこそ、天の父は、ご自身の最愛のひとり子、何よりの喜びであり誇りであるイエスさまを完全なる人間としてこの世に送り、私たち人間の代表として十字架の上に滅ぼしたのです。人間を救うために。そうして神の義なる愛、愛なる義がどういうものか、示されました。だから、262番を歌い変えると、「**十字架のもとぞいとやすけき。神の義なる愛と、人間の罪のあえる所**」となります。このキリスト・イエスの十字架は自分の罪のためだった…と受け入れる時、私たちは、神の義なる愛、愛なる義の支配のしたに入れられ、神の国の民、神が支配される王国の民となる…と聖書は語り、代々の教会はそう信じてきました。

ですから、神の国というのは、人間が思い描く理想の国とは違います。神の愛も神の義も人間の理想として思い描けるものではありません。神の国の現実、神の支配の具体的な現実は、私たちにとっては、いつも新しいもの、未だ知らないものです。だからこそ、私たちは「**御国がきますように**」と祈るように主イエスに教えられるのです。人間がすでに手中におさめ、すでに私たちが知っている事であるなら、神に祈り求める必要はありません。ルドルフ・ボーレンという神学者が次のように祈っているとおりです。「**主キリスト・イエス、あなたは造られる、未だかつてなかったものを一私をも新たに、未だ経験されていないことへの途上で私をとともに連れ行かれる。**」主キリスト・イエスが造られる未だなかったもの、私たちが連れ行かれる未だ経験していないこと…それこそ神の国です。神の国は、いつも現在進行形で新しくこの地上に生まれています。

4 神の国は私たちの間にある

では、具体的に神の国、神の支配とはどこにどのような形で来るのでしょうか。主は、「神の国はいつ来るのか」と問いかけたファリサイ派の人々に次のようにお答えになりました。「**神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。**」(17:21)。ここで「あるのだ」というのは現在形。すでに神の国は、この地上で始まっている、この地上の私たちの間で、既に神の支配が始まっていると主はおっしゃいます。イエスさまがこの地上に来られたことで、神の義なる愛、愛なる義の支配が始まっています。私たちが主イエスが示された父なる神の愛のうちに、主イエスの言いつけを守って生きる所に神の国が現れるといいます。それはどこか？

五月に行われた日本ナザレン教団の伝道会議で講演してくださった朝岡勝先生は、牧師三年目に休職して神戸の改革派神学校で神学をみつ

ちりと学び直しました。その時の恩師が次のように言ったそうです。「教会の礼拝こそ、神の国の最前線だ。ここから全く新しい神の支配が、人間の支配を凌駕して始まる」。つまり礼拝こそ、神の国の最前線、いま、ここで捧げられている横浜ナザレン教会の礼拝こそ神の国が新しく生まれている現場です。イエスさまの十字架のもと、神の義と愛が人間の歴史の中に打ち込まれた所、今という時代に生かされている私たちが父なる神に捧げている礼拝、父なる神の御名がキリスト・イエスにあって崇められ、賛美と感謝の祈りがささげられる今、この礼拝で、私たちは、古い自分を捨て、新たにされます。いま、ここに新しい神の国、神のご支配が生まれています。

そしてそれは、今だけ、ここだけで消えていくものではありません。この礼拝が終わってそれぞれが帰っていく場所。そこにも神の国の最前線がひろがっていきます。私たちのいく所、生きる所が神の国の最前線なのです。人間中心の考えが支配するこの世に私たち一人一人が出て行く場所です。そこで、「御国が来ますように」と祈る、自分と自分の周りの人が、神の義なる愛、愛なる義にとらえられ、その支配のもとに生きることができますように！そう祈り、主イエスにしたがいゆく生活の現場は、神の国の最前線です。

5 神の国

だから、主は神の国を次のようにたとえています。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。」ほんの小さなからしだね。ソーセージなどにつけるマスタードの中に含まれている黒い粒つぶが、どうやらイエスさまの仰る辛子だねと同種ものらしいのです。米粒やごまよりも小さくて直径0.5mm。そんなに小さい種、吹けば飛ぶような種が成長して鳥が巣をかけるような大樹となります。その有様が神の国のようだ…と主イエスは仰っているのです。小さなからしだねからは想像できないような全く新しいものへと成長していく…と主はおっしゃいます。それは私たち自身の姿です。

6 苦難

しかし、その成長の過程は楽しいこと、嬉しいことばかりではありません。いえ、成長する最先端のところ、神の国の最前線は、苦しみもまた多いでしょう。自分の中にも、この社会にも働く人間の支配が神の支配に抗う最前線でもあるからです。敵をも愛する神の愛のうちに生きることは、私たち人間にとっては難儀なことです。私たち一人一人のうちにはそのような神の正しい愛はないし、この社会は、人間中心の社会だから。権力や富のある者が、弱く小さく貧しい者を支配する社会です。建前では「人間はみな平等」と言いますが、実際はそうではないことは皆さんもご存知でしょう。支配者の命は尊いが、そうでな

い弱い人々、貧しい人々の命は蔑ろにされています。この社会の支配者層の力の追求のために、弱く小さい人たちの命を損なっても構わない…というのが私たち人間社会の現実ですし、多くの人が自分に直接被害が及ばないのであれば、声をあげることはありません。自分たちさえよければいい。それが人間社会の現実です。神の支配のうちに生きようと祈り願う者もまた、この人間社会と関係なく生きることはできません。肉体をもってこの地上を、人間社会の中を生きていかざるを得ないから。

だからこそ、様々に悩み苦しみます。人生に迷います。病気や貧困、差別などに悩みます。また人生をどう切り開いていったらいいのか、迷うことも多々あります。時には呻きをあげるしかない辛いこともあります。どうしてよいか分からないこともあり、自分との戦いもあります。だからこそ、私たちはそこで、神の支配を祈り求めるのです。叫び声をあげる。「今ここに、悩み苦しむ私のもとに御国がきますように、どうか主よ、私の苦しみを悩みをご存知である父よ、どうか、あなたの力を私に奮ってください。敵を愛する愛の主よ、私はあなたの民です。どうか、私を見捨てないでください!」。何度も何度も繰り返し繰り返しそう叫ぶ所、祈る所、そこに神の国が現れます。そこが神の国の最前線なのです。

7 ローマ書5章

今日のもうひとつの聖書テキスト、ローマ書5章1節から11節。口語訳で紹介しましたが、2節「わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵み」と訳されている部分、直訳すると、「今立っているこの恵みに入る入口を今自分は手にいれている」であると五月の伝道礼拝で取次ました。今も恵みのうちにいる、神の国の中にいる。しかし、それで終わりではない。更に新しい恵みの入口に私たちは立たせられている。進みゆく神の国の最前線にいる…とパウロは言っているようです。だから、苦難をも喜び、誇りとできます。苦難を通して私たちは、新たに忍耐を学びます。忍耐とは我慢ではない、自分を大きくして自分の力で困難を凌ぐのではありません。神に心を開き神に変えて頂くのです。それが練達です。練達には、刻印という意味もあるとこれもお話しました。今一度思い返したい大切なことです。刻印とはイエス・キリストの恵みの刻印です。イエス・キリストの恵みを受けて、新しい自分へと変えていただく。一度変えて頂ければそれでおしまいということはない。より善い者に、神に喜ばれる者へと変え続けていただく。そこに神の国の希望が生まれます。そこが神の国の最前線であり、私たちを決して欺かない希望があります。敵をも愛す愛が豊かに注がれる最前線です。

私自身、このように講壇の上から聖書を取り次がせて頂いていますが、本来の力からすればここに立つことなど到底かなわぬ者です。しかし、現在進行形で神に変えて頂いている一人でもあります。だから、恐れつつ立つことが

できています。私はある方が過去に教会に対して行った大きな過ちに囚われ、そこから脱却できず苦しんだことがあります。私の傍らにいて悩み苦しみをつぶさに見て知っていただく役員の姉妹がこのように声をかけてくださいました。「先生、過去を見るのではなく、前をみましょう。神さまが働いておられますよ。」と。その言葉を聞いた時、確かに「ああ、そうだ、神が働いておられる。だから私は苦しんでいるのだ。私が働いていたら、私は苦しまない、悩まないだろう。だが神が働いておられ、私や教会を未だかつて到達していない所に導こうとおられるからこそ、私は悩むし苦しむのだ」と。私もまた神の国の最前線にいることに、その姉妹は気づかせてくださったのです。

8 神の国最前線にいる共同体

別の姉妹は、また「先生、祈っていますよ」と電話をくださいました。「私は一人で神の国の最前線に立っているのだが、一人ではない。からしだねの木に様々な枝があるように、別の枝では仲間が神の国の最前線にいる。そうして私のことを神に祈ってくださる。」と気づかされました。

この写真は、横浜教会の敷地に植えられた木です。ひとつひとつの枝が青空に向かって上へ上へと伸び、そして木全体が天へと向かってのびていきます。それと同じように、この礼拝を共に捧げている私たちも、礼拝が終わればそれぞれの場所へと帰っていきます。しかし、そこで神の国とは切り離され、バラバラに生きるのではありません。キリストのからだである教会という木のひとつの枝として、一員として、「御国がきますように」と祈り求める、叫びをあげるのです。神の民の一員として、神の国の最前線を生きていくのです。そうやって、横浜ナザレン教会というひとつの木は、神の国の最前線をあゆみ続けます。そこには必ずやキリスト・イエスが共にいてくださいます。

今、ここに集っている方が、悩み苦しみの中であつたとしても、神の国の現実にはゆるぎません。移ろいやすい人間の現実ではなく、神の現実だからです。どんなにあなたが悩んでいても、苦しんでいても、私たちには祈りが与えられています。「御国がきますように」という祈りが与えられています。主よ、苦しむ私の所にも、悩む私のところにも、迷うわたしのところにも、御国がきますように、私の信仰の友、教会の仲間のところにも、御国が来ますように、私たちの思いではなく、あなたの思いのみになりますように。あなたの義なる愛のご支配のうちに私達を変えてください、新しい私に、私たちにしてください！と叫びをあげた時、神が私たちに注ぐ愛に気づかされるでしょう。そうして私たちは、自分の心の方向を神へと整えられ、そして神の国の最前線を生きていく具体的な導きが与えられるのです。これから始まる一週間も、主イエスと共に、そして横浜ナザレン教会の皆さんと一緒に、「御国がきますように」と祈りつつ歩んで行きたい、神の国の最前線を私たちの中にも、この世界にもひろげていく者とされたい…と切に願います。